

報 告 書

報告日 令和8年6月9日

日 時	令和8（2026）年5月19日（火）午後1時45分から午後3時45分まで
場 所 （会場）	妙高市立新井南小学校
概 要	・小規模特認校制度について ・妙高型イエナプラン教育について
所 感 等	【山本博文委員長】 新井南小学校は少子化や複式学級化への懸念から、平成28年（2016年）に市外からも広く入学者を募集し、「小規模特認校制度」を導入した。更に令和2（2020）年度からは、自立と共生を重んじるオランダ発祥の個人教育「イエナプラン教育」を妙高市独自にアレンジした「妙高型イエナプラン教育（新井南小イエナプラン教育メソッド）」を導入した。学年の枠を超えた異年齢学級集団での「国語・算数の自由進度学習」や1日の始まりと終わりに全員で対話する「サークル対話」を実践していた。特に、授業中に伺ったが子どもたちがのびのびと明るく、それぞれのテンポと方法で学ぶことを推奨し、先生方はその子どもたちを見守りながら適切な支援と伴走をしていた。新井南小学校の児童数は50名で、そのうち約半数の23人が校区外からの通学であり、教育環境を求めて移住、編入する家庭もあり「選べる学校」として児童数を維持している。視察や説明終了後の質疑では基礎学力検査の数値的課題はあるものの、自己調整力や幸福度といった非認知能力の向上が高く評価されていることや記述式評価を廃止し、三者によるプレゼン形式の評価を導入している点や特別な支援を要する児童が自然に溶け込むインクルーシブな環境が整っていた。今回の委員会視察において学んできた事を柏崎市でも活かせる部分があると感じた。 【池野里美副委員長】 小規模特認校になった経緯として、少子化で学校の統廃合が進む中で、妙高市の南側地域にも一つは小学校を残して欲しいという地域住民の願いから、学校を存続させるために小規模特認校となった。当初は、自然豊かな地域の特色を生かした教育と、英語に力を入れた特色ある教育を行い、台湾の小学校との交流を英語で行ってきた。6年生は2泊3日で台湾に行き現地で妙高について英語でプレゼンを行っている。これは、市の事業として渡航費の半額を市が補助している。しかし、少子化が進み学校を残すため新たな教育を模索する中で、当時の教育長が長野県の大日向小学校のイエナプラン教育を視察し大きな衝撃を受け、「令和の日本型学校型教育」として、妙高型イエナプラン教育を始めた。 実際に子どもたちの授業の様子を観させて頂き、自分でやることを決め一人で取組む子、友達と取組む子など、進め方や取組む場所も、自分で選んで意欲的に取組む姿、先生方が子どもたちを信じて任せて見守る姿が印象的だった。自由進度学習は、教員

の力量が問われる。先生方の心理的・時間的余裕が必要であり、個々をよく観て個々に応じた指導をするための研修として、なぜこの教育が必要か子どもたちと同様、教職員もサークルで集まり対話型の研修を重ねているとの事であった。

イエナプラン教育を始めてから校区外からの転入や県外からの移住など、選ばれる学校になってきていると伺った。実際に見学し私も感じたが、受け身ではない授業、学年を超えた交わりの中で、自分が大切にされる事で、他者も大切にできる。対話型の授業を通して、本当の意味での生きる力、眼に見える学力だけでない力が育まれていると感じた。これは小規模の良さであり、大規模の学校で同じことは難しいと感じる。柏崎市においても、小規模の学校が生き残る道として、また、多様な子どもたちの選択肢の一つとして、イエナプラン教育を取り入れることを検討して欲しいと感じる視察であった。

【三嶋崇史委員】

妙高市が進めるイエナプラン教育は、子ども主体の自立と共生を育み、多様性の価値を高める教育として市内の学校に取入れ、各学校で特色が異なる。また、小規模特認校ならではのメリットを活かし、イエナプラン教育を実践して児童の可能性を先生や保護者、地域が見守っている。教室には保護者から子ども達へのメッセージや市の教育関連資料など掲示され学校教育への熱心な取組が伺える。学習環境は、児童の自主性、対話に応じた机の配置、異年齢学級（低学年、高学年）に分かれ、自由な学びの中にも先生方の指導により、授業時間の充実を図っている。また校舎内は綺麗に掃除され、整理整頓された開放的な学び舎であった。

子どもの自主性に任せた教育を目の当たりにし、私の中で驚きと戸惑い、未知の可能性、期待等が入り交じった感情を持った。そして、主体的な学習には欠かせない先生方の工夫や努力、学習環境の整備などが確認できた。児童、先生、保護者間の対話や情報交換等を重視しなければ、児童の自主性を育む学習は出来ないと感じた。イエナプラン教育とは、何が正しくて何が間違っているのかではなく、対話と多様性の価値を認識し、アップデートしていく事が重要であると学んだ。

【田邊優香委員】

「小規模特認校」とは自然環境に恵まれた小規模校を中心に、特色ある教育を展開することで、校区外からの入学を認める制度である。新井南小学校は平成27年（2015年）に指定が決定し平成28（2016）年度から小規模特認校としてスタートした。当初は希望者がいなかったが平成29年（2019年）以降体験入学や、オープンスクールの実施広報誌や市のホームページで情報発信を積極的に行い校区外の生徒が選択できるよう環境を整えてきた。その結果、現在では全校生徒の約半数が校区外から通う学校となっている。

教育面では、妙高型イエナプラン教育メソッドを取り入れ、「子どもが主体的に学ぶことを中心に据えた独自の教育」を展開している。自由進度学習により、子どもが自ら学びを選び、深める姿が見られるほか、外国語教育の充実として台湾の学校との交流や宿泊体験学習など、実体験を伴う学びも積極的に取り入れている。これらの取組は、子ど

もたちが自分のペースで学び、他者と協働しながら成長する環境をつくり出している点で大きな特色である。

学校運営において、主役は子どもという理念を徹底しつつ、それを支える大人の役割も明確に位置づけている。教師は「伴走者」として子どもに寄り添い、学校運営会議や「明日の南小を考える会」など、多様な関係者が学校づくりに参画する仕組みが整えられている。こうした体制は、学校が地域とともに成長し続けるための重要な基盤となっている。今回は授業中に視察をさせていただき、学んでいる子どもたちの生き生きした笑顔や考えている姿が非常に印象的だった。柏崎市としても学べる部分が多くあるのではないかと感じた。

【持田繁義委員】

イエナプラン教育を取り入れることの先進性は理解できる。現実には小学校が中心であり、卒業後の中学生においてどのように活かされていくのかが、大きな関心ごとであった。もっと言えば、その子の人生にどのように影響していくのかでもある。

お聞きしたところ、学力は総合的だということを改めて認識した。単なる点数ではなく、学力点数は一定で抑えても、その子の学ぶ力、学びたいとする積極性、そこから生まれる「自信」の発展が重要なことと感じた。一つの例として、ある子が中学生に進んで「生徒会長」として活躍していることの報告を聞いて、ある意味、納得感を得たところでもある。

もう一つの側面として、教員の力量も試されているように思える。子どもとともに成長しあう、問題意識をどこに持って、教員としての相当な力量も求められ、必要な過程をたどる必然を理解するところでもある。

妙高市による、人口減少に伴う小規模校の活性化を背景に「小規模特認校制度」を活用し、さらに一歩踏み込んで「妙高型イエナプラン教育」を公立学校で展開している非常に先進的な事例を確認できた。

視察の中でも話したことであるが、令和元年（2019年）、長野県南佐久郡佐久穂町が日本で初めてイエナプラン認定校になった。移住者が増えるなど地域の活性化に一役、寄与しているとも伺う。調整できるなら、伺ってみたいとも感じている。

【重野正毅委員】

全国あるいは県内には様々なコンセプトで組み立てられている小規模特認校があります。今回視察させてもらった妙高市立新井南小学校は、保育園と併設になっていることを含め、地域との関係性が密になっている様子が伺えました。妙高市は妙高型イエナプランとして市内全小中学校をあげて取組んでいるとのことですが、このイエナプランは地元の理解や協力なしにはなしえないことです。ここまで積み重ねてきた実績、強み、メリットがある一方、課題も少なからず見えてきています。柏崎市で取り入れられることはどんなことがあるかはよく分析、研究していく必要があると感じました。

柏崎市では現在、北条小学校を小規模特認校とする方向で検討しています。どのような特色を掲げ、通学する児童やその保護者が満足できる教育活動が行えるようにな

るか、私も調査研究を進め、当局に働きかけられるようにしていきたいと思います。

【相澤宗一委員】

新井南小学校は「小規模特認校」に指定されており、少人数の特性を活かして、子どもが主語となる学校づくりを進めている。その一環として導入された「妙高型イエナプラン教育」では、一斉授業ではなく、自分で時間割や学ぶ場所を決める「自由進度学習」を取り入れている。

授業の様子や施設を見学させていただいた。これまで私がイメージしていた授業参観とは、子どもたちが真剣に先生の話聞き、あるいは友達と向き合いながら、参観者もいることから静かな雰囲気の中で学習している姿であった。

しかし、新井南小学校の1・2・3年生と一緒に学ぶ教室（エリア）は、そのイメージを見事に打ち砕いた。

まるで日本ではない別の国に来たかのような感覚であり、教室に足を踏み入れた瞬間、児童から「やあ！こんにちは、ゆっくりしてってください」と気軽に声を掛けられ、大人であるこちらが逆にどぎまぎしてしまった。

4・5・6年生のエリアでは、児童が一堂に会しているものの、それぞれが自分の授業計画に基づいて学習を進めていた。

そのエリアには、これまで見たことのない「楽希相努」という児童手書きの四字熟語がいくつも掲示されていた。

「楽希相努」の4つの漢字を調べると、それぞれ次のような意味があるようだ。

「楽」...自分のペースでまずはリラックスして楽しく課題に取り組む。

「希」...目標や見通しを高く持ち、自分の力でどんどん進めていく。

「相」...友達や先生と相談し、教え合ったり対話したりしながら協力して学ぶ。

「努」...1人で静かに集中し、じっくり努力して課題をやり遂げる。

これは、イエナプラン教育の基本である「主体性」「対話」「協働」「多様性の尊重」といった考え方につながる4文字であると感じた。

このように具体的な言葉で表現することで、教育の目指す方向性が多くの人に浸透していくのではないかと感じた。

また、この妙高型イエナプラン教育は、手法を統一したものではなくあくまで理念の共有であり、具体的なメソッド（方法・手段）は各学校に委ねられているとのことであった。そのため、「型にはめない」という考え方自体が、この教育の特徴であり、非常に興味深く感じた。

